

南方（フィリピン）

私の足跡、二度と戦争する勿れ

兵庫県 松田 勇

はじめに

戦争の労苦を子孫に語り伝えるためには、なぜ戦争が勃発するか、原点を語る必要がある。ただ無意味な生命のやり取り、殺し合いだけではない。太古よりの生命は総て動物に限らず植物に至るまで、弱肉強食の世紀を繰り返してきた。人間が地球を征服し、人口が増加し、文明文化が進展するとともに、大自然が破壊され、主義・主張・宗教等の異なり、また私利私欲のために、人を殺し、国を侵し、生物を撲殺した。

日本も大昔から随所において侵略殺戮を行い、長い戦国の乱世の終結を、信長・秀吉・家康にて幕を閉じた。結果、一見平和のごとき時代が流れた。されど士農工商と身分の上下関係を作った。下級な人間と格付けされた者は長い間耐え忍んだ。明治維新以後、明治天皇の政治となり、一応平和国家となったが、武力権力の象徴として親衛隊を創設し、徴兵制が布告された。天皇は現人神まにひとがみであった。

明治十五年一月四日、「軍人に賜りたる勅諭」の発布にて確固たる軍隊が発足した。国民の三大義務の中で一番重大な男子青年に達せば徴兵検査を受けること。事の如何いかんを問わず「合格者」は軍人として徴募・応召させられた。緊急の場合は二十四時間で出頭の場合もある。軍隊（人）は総てこの軍人勅諭が根幹をなし、

基本として終始した。

前文の「我が国の軍隊は世々天皇の統率し給う所に
ぞある……」一〇四五文字。次に、

一、軍人ハ忠節ヲ尽スヲ本分トスベシ

……二六四文字

二、軍人ハ礼儀ヲ正シクスベシ

……二八七文字

一、軍人ハ武勇ヲ尚ブベシ

……二八七文字

一、軍人ハ信義ヲ重ンズベシ

……三三九文字

一、軍人ハ質素ヲ旨トスベシ

……二二五文字

そもそもこの五箇条は我が軍人の精神にして、一つ
の精神……二〇九文字で結ばれ。総文字数二六八一字
で、日本陸海軍軍人の指針を明確にお示しにされた。
以来、明治・大正・昭和初年と軍部が擡頭して行政
に立入り、事件・事変と発展し、最終的には昭和十六
年十二月八日の国交断絶・宣戦布告で大東亜戦争の火
蓋が切られた。

私の軍足跡

昭和十七年四月五日、大阪陸軍造兵廠・播磨製造所
入所（徴用軍属）。

同年八月八日、中部第五十四部隊入隊（応召）。姫
路市街北部広峰山麓に兵舎在り、城北練兵場、東西約
千メートル、南北約五百メートルにて訓練す。歩兵教
練と自動車操縦訓練等々を行う。

同年十一月三日、姫路参道三三三号にて、出勤命
を受け転属す。同出発。

同年十一月十一日、満州国樺川県佳木斯、満州第一
二四部隊、朝日兵営にて特訓を受く。

同年十二月二十五日、第十師団輜重兵第十連隊第二
大隊第六中隊に配属、一人前の兵隊。古兵と起居を共
にして、内務班の厳しさを知らされ、自動車隊の初年
兵としての第一歩を叩き込まれた。

特業、喇叭手（マラソン得意で伝令要員）。就中、
将校集会所・連隊本部・大隊本部当番と衛兵所勤務等
と総て熟知敢行、勿論、本科の自動車の走行操縦・修
理点検等も絶対人後に落ちることなく訓練をした。冬

季の零下何十度の厳寒におけるソ連国境方面への諸物資の輸送は何度行っても大変だった。また夏季の湿地通過訓練・昼夜転倒・バルチザンゲリラ搜討訓練・関東東軍・師団合同、連隊の大隊、中隊と寒暖の冬夏を問わずの猛訓練は非常に厳しかった。当時、「関東東軍は百万と称せられ世に冠たる精鋭軍団」と言った。

昭和十九年七月二十八日、捷号作戦命令にて、第十師団（通称号鉄兵団）南方出動となる。

同年八月四日、駐屯地出発。一路満州鉄道でハルビン・新京・奉天を経て鴨緑江を渡って釜山に集結（そのとき米軍機の夜間空襲があった）。

同月十五日、釜山出港、門司にて梯団を組む。

同月二十八日、台湾基隆入港。船中の二週間は丘に上がった河童のごとく、青菜に塩だった。

同月三十日、台中の南の彰化街に駐留す。三カ月間、対ソ戦闘訓練と異なり、対米戦闘は、夜間の斬り込み演習だった。毎夜尻にタオルをぶら下げて目印にし、小さな小山（八卦山）を這い回った。

十二月三日、作戦命令にて高雄港に結集す。

同月十三日、鉄兵団本隊は三隻の輸送船に分乗出港す。目指すはフィリピン・ルソン島。

同月二十三日午前十時、北サンフェルナンド港に投錨す。即、揚陸作業に全力を挙げる。同僚船「乾瑞丸」が前日より機関不調にて少し遅れていたが、敵の潜水艦の魚雷攻撃を受けて、港外三千メートル洋上にて轟沈す。我が連隊主力が乗船していたのに、リンガエン湾の海に悔恨す。

昭和二十年一月四日、米軍機動艦隊、リンガエン湾に現る。奥地サンホセへ進駐す。（五号国道）ブンカン・シミヌリ。全自動車大回転で、全軍の弾薬・諸資材物資を搬送す。敵飛行機の襲来激しくなり、昼間は隠蔽行動し夜間のみの行動となった。

同二月二日払暁、バレット峠通過。同峠は後に比島第一の激戦地となつて米軍戦誌にも「多大の損害を受けたため、現在は大ルトンバレット峠という。北部ルソン島の中央部に東西に連なる、千数百メートル級の山岳地帯をカバリヨ山系といい。西はバギオの西方か

ら、サラクサス峠、バレテ峠、鈴ヶ峠(旧スペイン道)を経て東方人跡未踏の山々の先が太平洋です。峠の北側登山口の町がサンタフェという。その前方の深い谷を大和谷と命名し、この地を鉄五四五四第一大隊の重点基地にす。

註・この時点より随所・拠点に日本名を付して、現地図に挿入せり。

バレテ峠における鉄兵団は鵬形防御の陣で、あたかも大鷲が雄飛してゐるかのごとく。右翼先端より、桐・柳・樫・榎・建武台・赤城山・榛名山。(中央部に)前方より(先陣)妙義山・雄建台・金剛山・天王山。(司令部)朝日山。左翼に青山・南山その後には要山。その中間に、南北に長く、南妙高山・北妙高山と布陣せり。

なお、鉄兵団本体に配属部隊、津田支隊以下七部隊、増加部隊(三月以降)十四部隊にて、総兵員・二万七〇二名なり、本作戦にて戦没者一万八七二六名。

同五日、マンカヤン、五号国道アリタオ東南二千米トル山麓地点を自動車大隊基地とし、各陣地、バレテ

峠を中心にして東西の山岳や深い谷々に第一・第二大隊協力して、輜重兵の本分を發揮せり。

なお、満州第一二四部隊を出陣時の編成表は、

大隊本部 指揮班二〇名 作業隊一〇名

付 修理班 二個分隊二八名

第四中隊(義烈隊) 九九名

指揮班・三個小隊・六個分隊

第五中隊(尽忠隊) 九七名

指揮班・三個小隊・六個分隊

第六中隊(結誠隊) 一〇六名

指揮班・三個小隊・六個分隊

台湾にて数名の入院患者あり、比島戦線時は多数の補充増援が各中隊にあった。なお、名簿中終戦時の生存者は三〇名だった。

三月六日、第二大隊第一線配備の命下る。歩兵大隊と改編し、重機関銃小隊を中心に、三個中隊各々軽機関銃分隊等々再編成して、勇躍妙高山陣地に出陣す。

マンカヤン基地は最小限の兵員にて警備及び輸送に専念す。

四月二十日、師団司令部へ転属命令あり、最前線糧秣所警備分隊長（一個分隊引率）着任。

六月一日、マンカヤン基地（原隊復帰）。

同月三日、同地出発、前夜来アリタオに砲弾の飛来炸裂するを目にする（兵站病院等）。

同月五日、ビノン峠。

同月十三日、カシブ着五号国道より遙か東南東四十キロの盆地。鉄兵団集結完了。

七月十四日、カシブ出発、東北ピナバガンに向かつて、先頭（抜刀隊）として移動す。

八月二日、ピナバガン着。即食料を調達して救援隊で出発す。約二十日間人跡未踏の山岳地帯を携帯食料欠乏し、傷痕の身に医薬なく、熱帯地の病魔に襲われ、倒れし戦友幾百千、その惨状を目にしたときのこと、今思い出しても、息をのむ戦闘以上に悲惨壮絶でした。

八月二十日、終戦を知らされる。ああ敗戦だ、ただ一人惜として声なし。武装解除のために火器銃機弾薬の員数合わせを行い、残余の武器は山中深く穴を掘って埋めた。

ただし、万一不測の事態が生じた場合は、この地に引き返して埋蔵武器を掘り出して戦うのだといって数名にて処置した。知る者は私の外に軍曹が一名だった。なお、三八式騎兵銃の菊花の御紋章は、完全に消滅して敵に渡した。盡忠精神の表れだと思う。

九月十二日、陣地より下山、全員眼光のみ鋭く、体はヒョロヒョロだった。

同月十九日、ビナレット・ジョネスにて、米軍前線部隊と接解（武装解除）。

同月二十三日、エチアゲ飛行場にて（武装解除）。日本軍服から禪まで全部焼却。頭から足先まで、全部米軍の衣服を着用す。背中と両足にはペンキでPWと書いてある。

トラック一車両に五〇名あて乗せられて運ばれる。南に向かって走っている。各地が戦場の跡であるから人家はなく焼け野原である。パレテ峠の頂上で一時ストップしてくれた。この地は我が鉄兵団二万余の軍人が生命を賭して戦った場所だ。山形が変わるほどの砲爆撃され、火焰放射され地肌が焼けて黒くなっている。

草木は一本もなく、心より戦友の御冥福を祈った。

(戦後、現地慰霊団として御遺族を御案内して、五度、六度も参拝しました)

同月二十八日、マニラの南ラグナ湖畔のカランバの仮大收容所に入る。ここで驚いたことがある。戦中に捕虜になった者が大きな顔をして米軍の指揮下にあつて、栄養満点の体で、私たちに指示命令をしていたことだ。一幕舎に五〇人詰め込まれ、水のようなお粥をコップ一杯くれた。朝起きると何名かの遺体が表門の所に毛布に巻かれてあつた。

十月二十八日、マニラ第十地区作業隊。

十一月三日、マニラキャンプ(ケソンシティ)新都市建設の道路作業隊。

十二月二十三日、作業隊として再度転送され、トラックは一路北上して降ろされた所は、何という因縁か、一年前の今日上陸した同じ地点だ。満一カ年の悪夢として片付けられようか、心中は何人にも計り知ることはいできないだろう。とにかく、双六の振り出しだ……。サンハンの砂浜に天幕を張り、棒を立て、鉄条網を張っ

て北部ルソンのPW基地となる(メインスタックード)。

昭和二十一年一月八日、作業隊として先発。オーデナスだ、ポロ岬の最先端に設営す。三方がサンゴ礁の海で一方のみ柱を立てて鉄条網を張り、東と西と二個大隊の入る天幕を張り、炊事場・医務室及び病室・シャワー施設等々を建設した。ここは戦車・自動車・大砲と重火器から衣服・腕時計に至るまで全部の軍需品が揃っていて、毎日作業に行く。大型自動車で来る所は何十名、ジープで来る所は数名と、それぞれに迎えに来る兵隊と慣れ親しんでやっていた。私の幕舎二十名の中に若者が二名。

軍政要員の話

幕舎は部隊混成です。東北の人、関東中部の者、四国、九州と全国の人でした。各人故郷の食い物の話が一番で、次いで風俗習慣などを語って虜囚の憂さを晴らした。前記二十歳前の若衆は、軍人ではなく軍政要員だった。当時の日本帝国政府には拓務省、軍需省、大東亜省などが設置されていた。拓務省が創設した機関で「興南練成院、大東亜練成院」と呼称し(第一部

は司政官の短期研修、第二部は大学高専卒で対象は一カ年、第三部は中卒対象で二カ年)、軍政要員を養成した。総称して、拓南塾といった。彼らは第三期だった。他の要員と計三十三名が北ボルネオ派遣第三七軍付けで受令した。うち二十二名が陸軍、八名が海軍の雇員だった(海軍は理事生と呼称す)。陸軍組は一名病欠である。

彼らは八月中旬、宇品港より出航し、九月二十一日バシー海峡で敵潜水艦に撃沈され、無事に救助されてマニラ兵站到滞したが、戦況が悪化して任地への渡航は不可能となった。それ故に比島派遣第十四方面軍の各部局に転属となった。内訳は報道部十名、政務班四名、同付属比人教育隊四名、同比島民族伝統文化研究所二名でした。計二十名中一名はバシー海峡にて海没船と運命を共にした戦友でした。

各グループは十二月末にマニラを撤退し、報道部関係はバギオに、他はカガヤン峡谷に向かった。比島伝文研はマニラ東方拠点に入った。米軍上陸の直後に四十歳未満の囑託軍属と共に兵隊となる。軍の待遇は第

二国民兵らから臨時召集扱いされた者として、一ツ星の兵隊さんでした(本来なら准士官か下士官待遇のはず)。本来なら最後はポツダム少尉かも。しかし彼らは軍事教練を受けていない非戦闘員だった。中途よりペン取る手に銃を持たされ、戦いの終わりには軽機関銃を持って戦ったとか、負け戦のために報道の任を解かれ兵隊として比島の山野を走らされたのは残念だったと思う。戦後抑留(PW)中に知り得た戦友の中では、軍政要員上がりの若い兵隊さんのことが、今なお頭にある。

我々は昭和二十一年十二月、ポロ岬のオーデナンス残務整理を行って、サンハン、メインスタックードに帰る。

同月七日、北サンフェルナンド港より米軍のLSTに乗船出航す。ルソンの島影が遠く霞むときに、散華した多くの戦友並びに在留邦人の方々、また現地フィリピンの人たちに、申し訳ないことをしたと、心から念じた。

軍の作戦であった北部ルソン持久戦が、今少し早く

終結していたら、我が軍の損害もかなり少なかったのではないだろうか。復員船上の十日間は、なんとも言えない気持ちだった。戦争は「いやだ」と。

十二月十六日、名古屋上陸、復員手続等にて二、三日。十二月二十日故郷に帰る。

平和の尊さは、悲惨な体験をした者でないと理解できないだろう。私は今、平和の有り難さをつくづく実感しながら老後の一日一日を送っています。

比島戦末期 主計兵の思い出

新潟県 家塚 克 己

昭和十九年四月十日、関東軍化学練習隊に分遣を命ぜられ同日満州の牡丹江を出発。哈爾濱・齊齊哈爾を経て四月十二日龍江省富拉爾基に到着、同隊に入隊した。これが私の軍隊生活六年間の運命を大きく左右する原点となった。

同年五月十四日教育終了、原隊復帰を命ぜられ牡丹

江第三六三七部隊に入った。部隊に入ってみると、部隊は南方転出のため騒然としていた。私は同日、大隊本部付けで兵器係を命ぜられた。本部に行ってみると小林軍曹と言う兵器係がいた。副官に聞いて見ると、私の兵器は化学兵器のことで、一般の科学兵器ではなかった。

南方出陣の準備も整い六月十二日牡丹江出発。釜山門司を経て台湾に寄港、七月九日台湾を出港、どこに行くのやら船団は南方に向かった。私の乗った船は「瑞穂丸」、数十隻の海軍護衛艦に守られ、夕闇迫る基隆港を後にした。明けて七月十三日午前七時三十五分「日蘭丸」に魚雷命中、船団の犠牲になった。私たちは甲板に並んで「日蘭丸」に拳手の敬礼をなし、犠牲者の冥福を祈った。魚雷命中から船体が波間に見えなくなるまで実に三十一分、この間、退避可能時間は七、八分しかなかったという。魔のバシー海峡も無事に通り、七月十六日ルソン島マニラ上陸、ダガホイ小学校に入る。

八月十六日、大隊本部をマニラ城内のレトラ大学に